

## マルコによる福音書 7章 31節～37節

2016年6月23日

古本 靖久

1、聖歌 428番 「光にあふれる 永遠の住まいを」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 75 ページ）

4、テキストの位置

イエス様はイスラエルの民を救いに導くために遣わされ、その福音はまずガリラヤの小さな町に住む人々に伝えられていきました。そこから外へ外へと広がっていく様子が6章以降に見ることができます。

今回はシリア・フェニキアの女性に、イエス様のみ手が伸ばされました記事を読みました。

福音は外の世界へ	6:6b-13	弟子たちの派遣
	6:14-29	洗礼者ヨハネ、殺される
	6:30-44	食事の奇跡
	6:45-52	水の上の顕現物語
	6:53-56	まとめの句
	7:1-13	父祖たちの伝承とは
	7:14-23	旧約聖書の食物規定
	7:24-30	福音は異邦人の元にも
	7:31-37	異邦人の地でのいやし
	8:1-10	二度目の供食物語

マルコによる福音書は異邦人の地で、異邦人の読者に向けて書かれたと考えられています。彼ら異邦人は福音書を読む中で、福音が自分たちの元にも届けられたことを実感したことでしょう。

今回の箇所は、マタイやルカ福音書には記されていません。生々しい奇跡行為をマタイやルカが嫌ったとも考えられます。またマルコが物語の舞台としたガリラヤ北部にだけ伝わっていた物語である可能性もあります。

この物語はしかし、単なるいやしの物語ではなく、その背後に神さまの約束が隠されているのです。では一体どのような約束なのでしょう。

## 5、節ごとに

### ◆異邦人の地でのいやし

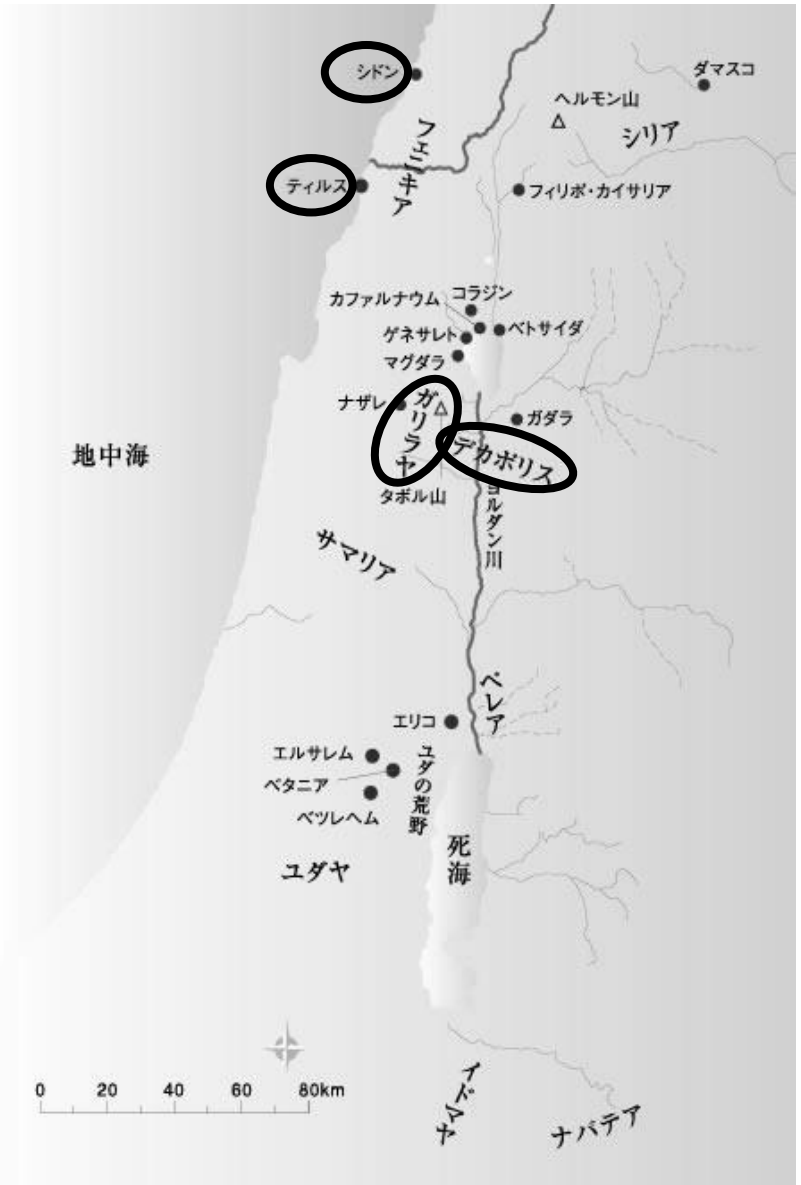
**7:31** それからまた、イエス（彼）はティルス（地方（地域））を去り（出て）、シドンを経てデカポリス地方を通り抜け（の真ん中）、ガリラヤ湖（の海）へやって来られた。

「それからまた」とありますが、イエス様がティルスに行った記事は聖書の中には一度しか書かれていません。きっと聖書に書かれていない物語もたくさんあるのでしょう。

ギリシア語では、1…モノ、2…ジ、3…トリ、4…テトラ、5…ペンタ、6…ヘキサ、7…ヘプタ、8…オクタ、9…ノナ、10…デカと数えます。モノレール、トリオ、テトラポット、ペンタゴン、ヘキサゴン、オクトパス、オクターブ、デカメロンなど、日本語でよく使う言葉も多くあります。

今日出てくるデカポリスは「10の都市」という意味で、ギリシアの都市連合がある地方を指します。デカポリスには、おもに異邦人が住んでいました。

さてここで、聖書が書いている通りに、イエス様が歩んだ道をなぞってみましょう。



### イエスが宣教した町々

ティルス→シドン→デカポリス→ガリラヤ湖。とてもおかしい順番だと感じるのではないのでしょうか。このことから、マルコ福音書を書いた人はユダヤ地方の地理に疎かだったと考えられています。

しかしここで重要なのは、イエス様は異邦人が住む地域を中心に活動されたということです。この地理を説明する記述がどうして大切なのか、見てみましょう。

**7:32** (そして) 人々は耳が聞こえず舌の回らない人を(彼の元に)連れて来て、その(人の) 上に手を置いてくださるようにと願った。

人々が連れてきた人は、耳が聞こえず、舌が回らない人でした。耳が聞こえないという語は、医学用語としても用いられているものでした。また舌が回らないという状態は、はっきりと話すことができないことを意味していました。

人の話を聞くことができないというのは、大変不自由なことです。今のように手話があるわけでもなく、また文字を書くことができる人も少なかったことでしょう。

彼の耳が生まれつき聞こえなかったかどうかは聖書に書いてありませんが、彼はうまく話すこともできませんでした。つまり他人に意思を伝えることも、他人の要求を理解することもできなかったわけです。共同体の中に住んでいても、社会的には疎外されていたのでした。

しかし、そのような彼をイエス様の元に連れて行った人たちがいます。2章 1～12 節の「中風の人をいやす」場面でも、周りの人たちによって、中風の人を連れて来られました。その中風の人々には、周りの人たちの信仰が取り上げられました。しかし今回は、「人々」についての言及はありません。

人々はイエス様の力を試そうとしたのか、イエス様にすがろうとしたのか、聖書からは読み取ることはできません。

**7:33** そこで、イエス(彼)はこの人だけを群衆の中から連れ出し(引き離し)、指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその(人の)舌に触れられた。

イエス様はこの人を、人々の間から引き離します。人から隠れて奇跡をおこなう様子は、列王記上のエリヤ、列王記下のエリシャ、使徒言行録のペトロの場面にも見られます。

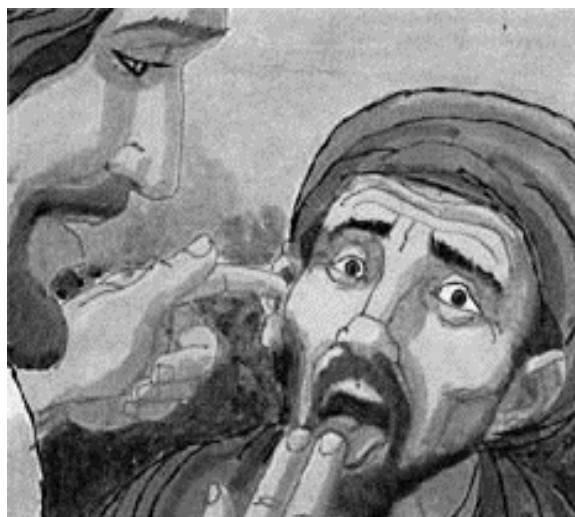
ちなみに「魔術パピルス」という紀元前 2 世紀から紀元後 5 世紀頃の古文書がありますが、その中では「魔術は寂しいところでおこない、だれも居合わせないように」と命じられています。イエス様がその古文書を読んでいたかどうかは別としても、当時の人々(伝承を伝える人や福音書を書いた人)に影響を与えた可能性は否めません。

イエス様は身体的な接触だけではなく、唾も用いられます。古代世界では唾は医薬品の役割を果たすこともありました。傷口に唾を塗って治すということは、今でも自然におこなわれています。そして当時は悪霊を追い出すときに、呪文と共に用いられることもあったようです。

7:34 そして、天を仰いで深く息をつき（嘆息して）、（そして）その人に向かって、「エッフアタ」と言われた（う）。これは、「開け」という意味である。

「嘆息」とは「嘆いてため息をつくこと。甚だしく嘆くこと」です。新共同訳聖書の訳だと何か大きなことをする前にする深呼吸のようにも思えますが、原語では「嘆き」という感情が含まれる語です。

イエス様はこのとき、激しい感情を見せました。奇跡をおこなう前の、精神の高ぶりもあったかもしれませんが。またそのころの病気は悪魔の仕業だと考えられていましたから、悪魔的な力と対決する前の興奮状態ともとることができます。



イエス様は「エッフアタ」という言葉を掛けます。この言葉はアラム語です。マルコ福音書には他にもアラム語がそのまま使われている箇所があります。「ボアネルゲス（雷の子ら・3章17節）」、「タリタ、クム（少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい・5章41節）」、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ（わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか・15章34節）」がそれです。

アラム語は異邦人にとって、呪文のように聞こえたかもしれません。しかしその言葉の意味を書くことによって、イエス様は魔術師とは違って、権威ある言葉を使って奇跡をおこなっていることを明確にしています。

7:35 すると、たちまち耳が開き、舌のもつれ（縛り）が解け（解放され）、はっきり話すことができるようになった。

イエス様が命じると、直ちにいやしの奇跡がおこりました。「舌の縛りが解放され」と訳しましたが、サタンによって、舌が縛られたということも意味しているのかもしれませんが。そしてその舌が、イエス様の業によって解放されたのです。

イエス様によって聞こえるようになり、話すことができるようになる。これが今回おこなわれた奇跡でした。弟子たちはこのような奇跡を目の当たりにして、イエス様をどのように理解していったのでしょうか。

しかし弟子たちは、この先の8章18節においても、イエス様にこのように叱責されます。「目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか。覚えていないのか」。

**7:36** (そして) イエス (彼) は人々 (彼ら) に、だれにもこのことを話してはいけない、と口止めを (命令) された。しかし、イエス (彼) が口止めをされればされる (命令すればする) ほど、人々 (彼ら) はかえってますます言い広めた (伝えた)。

イエス様の沈黙命令を、その人も、周りの人たちも無視します。イエス様の人気は、群衆の間に高まっていくのです。

この沈黙命令もまた「魔術パピルス」の中に書かれています。奇跡をおこなうときの所作や言葉を勝手に真似されたら困ると考えたのかもしれませんが。実際に使徒言行録 19 章 13～18 節には、イエス様の名を無断で使う祈祷師が登場します。

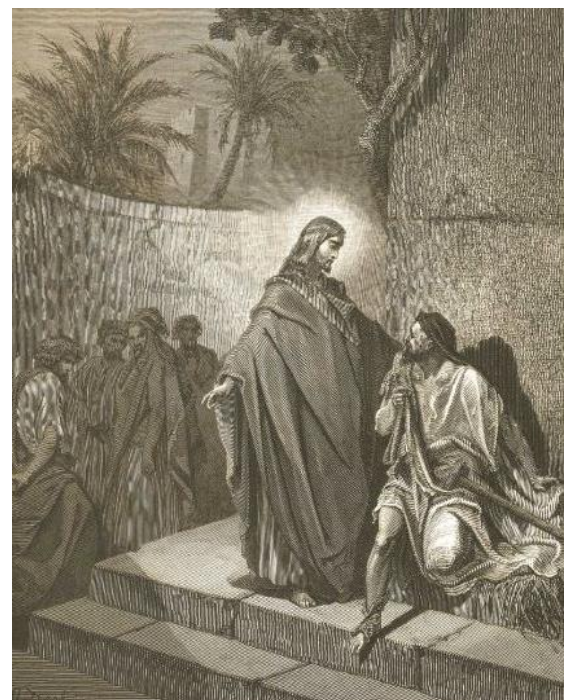
イエス様がおこなった奇跡は、確かにすばらしいものでした。しかしこれから起こるイエス様の十字架と復活という出来事がなければ、どんな奇跡も意味を持たないものです。イエス様は人々に、奇跡という不思議な出来事だけを一人歩きさせることを好まれなかったのかもしれませんが。しかしイエス様の意に反し、人々は好き勝手に伝え続けます。

**7:37** そして、すっかり (この上もなく) 驚いて言った。「この方のなされたことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてくださる。」

人々は「この方のなされたことはすべて、すばらしい」と驚嘆します。この言葉は創世記 1 章 31 節にある天地創造が完成したときの言葉、「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である」を想起させます。

当時のユダヤ人は、メシア (救い主) を待ちわびていました。イザヤ書では救い主の到来が、次のように預言されています。

そのとき、見えない人の目が開き 聞こえない人の耳が開く。そのとき 歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。口の利けなかった人が喜び歌う。荒れ野に水が湧きいで 荒れ地に川が流れる。 (イザヤ 35 章 5～6 節)



イエス様の周りにいた人たちやマルコ福音書の読者の中にも、旧約のこの預言を知っている人は多くいました。イエス様の姿を見たときに、彼らは単なる魔術師として見たのではなく、約束された神さまの救いの到来を感じずにはいられなかったのです。

ちなみにルカ福音書では、ナザレの会堂で伝道を開始したとき(ルカ 4 章 16～30 節)に、イザヤ書 61 章 1～2 節の預言が朗読されました。

主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。

マルコ福音書では、異邦人の地で神さまのみ手が約束通り伸ばされたことを報告します。イエス様によって救いの時が始まり、人々はそれを知って喜びの声をあげるのです。そのときに肉体が救われたのは、一人の人だけだったかもしれません。しかしそのことによって、異邦人全体に救いが間もなくやってくることを、人々は確信したのです。

### <今日の箇所から>

わたしたちは奇跡物語を読むときに、どうしてもその出来事だけに目を向けてしまいます。しかし今回の箇所には、旧約の時代から人々が待ち続けていたメシアの到来が、暗示されています。

わたしたちにもまた、同じようにイエス様を通した救いの計画が開始されたということ、聖書は伝えます。様々な奇跡は、わたしたち一人一人に対してもあらゆる束縛から解放されることを約束してくれます。

ところでわたしたちの目は開け、耳は聞こえ、口は語る事ができているでしょうか。肉体的な意味ではなく、心はどうだろうかという意味です。わたしたちは自分の力では、神さまの言葉に聞き、従うことのできない者かもしれません。大切なものを見誤り、途方に暮れているかもしれません。

しかしそのようなときにこそ、祈りましょう。イエス様は必ずわたしたちのそばに来て、耳を開いてくださいます。そしてイエス様によって聞くことができるようになったわたしたちは、次は周りの人をイエス様の元に連れていくのです。

さらにイエス様によって解かれた舌は、感謝と賛美を語ります。わたしたちがいただいているイエス様の愛を、多くの人に語る。それがわたしたちに求められていることではないでしょうか。

今回の学びはこれで終わります。次回は 7 月 28 日(木)10 時 30 分からです。「二度目の供食物語」(マルコ 8 : 1～10) について学んでいきます。